Created by Wataru Nishino 09/06/26

ウミガメさ～ん！

先週末に息子の通う中学校の学校行事で、「ウミガメの産卵観察」があり、親の同行が必要でしたので、私も一緒に参加しました。和歌山県日高郡みなべ町は全国的には梅の産地として有名ですが、そこにある「千里の浜」と言われる１．３kmの砂浜は、日本でも有数のウミガメの産卵地として知られた地域です。例年5月～8月にかけて多くのアカウミガメが産卵のために上陸します。

宿舎での夕食後、「南部ウミガメ研究班」の後藤代表からウミガメについての「事前学習会」がありました。後藤代表は現在80歳で、元小学校の教員。20年間ウミガメの研究と保護活動を千里の浜で行っておられます。20年間集めたデータはウミガメの生態を知る上で大変貴重な資料となっています。昨年はここ最近では異例の２６９回もの産卵が確認されており、今年はその反動で、現状昨年の約1/3位のペースだそうです。アカウミガメは絶滅危惧種に指定されているそうで、多くの学生ボライティアの方々が保護活動に参加しているということも知りました。「何の為に保護をするのか。べつに保護をしなくても人間の日常生活に影響がないではないか、との意見もあるが、それは皆さん将来考えてほしい宿題とします」、との話で締めくくられました。

「事前学習会」終了後、宿舎から車で15分位の現地まで行きました。雨だったので駐車場で待機し、ウミガメが上陸したら車に連絡していただけるとのことで、しばらく車で待機することにしました。30分位すると「上陸はまだなのですが、卵の移植作業が行われるので、見学しませんか」との連絡が入り、砂浜に向うことに。「卵の移植」は保護活動の一環で、波打ち際などで産卵された卵は波に流される恐れがあり、卵も呼吸をしていることから海水に浸かると死んでしまうので、波が届かない砂浜まで卵を移動させる必要があるとのこと。

卵の移植は、砂を掘り起こし、ピンポン玉位の卵を一つ一つ丁寧にカゴに移し、それを安全な場所に埋め直す作業です。生徒にも実際に卵を触ってもらいたいということで、生徒全員が交代で卵をつかんでカゴに入れる作業を行いました。中にはせっかく掘った穴を崩したり、卵を割ってしまう生徒もおりましたが、素人が深い穴に手を突っ込み、一つずつそっとつかんでは移す作業は時間がかかるものです。作業が終わったのは現地に到着してから2時間以上経った夜の11時頃。ここで一旦締めて宿舎に帰る人は帰り、待つ人は一緒に待ちましょう、との先生の案内があり、大半の家族はここで諦めて帰りました。息子にどうする？と聞くと、「もういい」、ということだったので、私も宿舎に帰ることにしました。

親としては折角費用と時間をかけて来たのだから、なんとか産卵を見せてあげたかったのですが、何分自然が相手で、来るか来ないかわからないものを待ち続けるのもいかがなものか、教育上も、自然が相手の場合(勝負ごとは最後まで諦めてはいけないが)どこかで見切りをつけることも必要ではないか、との思いと、正直真っ暗闇の砂浜で長く居たために飽きていたこともあって息子に同調したのでしたが・・・。

翌朝、先生に「昨晩はどうでした？」と聞いてみると、「夜中の１：３０頃にウミガメの上陸があり、産卵を見ることができました。産卵を最後まで見届けて宿舎に戻ったのは４時ごろでした。生徒と家族は全体の1/3位が残っていたのではないでしょうか」。最後まで見届けた方々は、恐らく徹夜も辞さない覚悟で、「なにが何でも産卵を見るぞ！」という強い思いで粘り強く待っておられたのかも知れません。

その後息子に、「もし、夜中の１：３０に来ると分かっていたら待ってたか？」と聞くと、「それは確実に来るんやったら絶対待ってたよ！」との返事でした。そういえば、「事前学習会」で後藤代表は、「あくまで、自然が相手ですので、人間の都合のいいようには行動してくれません。ウミガメさんは、「何時に行くから」と予約もしれくれません、見ることができればラッキーと思ってください」、という話があったのを思い出しました・・・。

２００９年6月　西野　律